


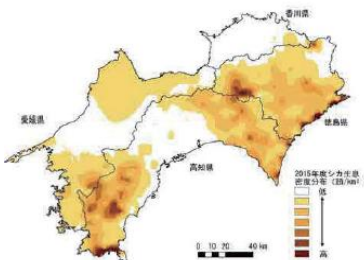
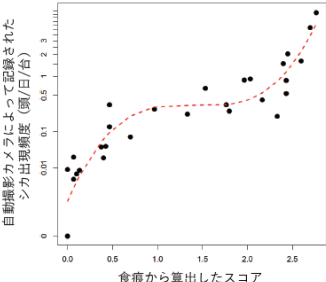
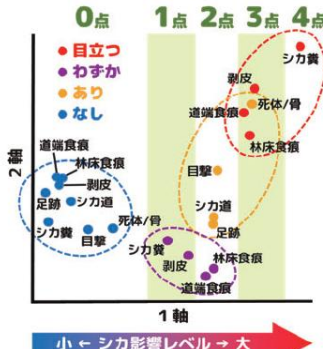


6 林 業

項 目	作 業 内 容
(1) 被害対策の特徴を知る	<p>(今月の作業のポイント)</p> <p>○林地における獣害対策</p> <p>冬季は餌が少なくなるため、特に獣害が発生しやすい時期となる。その中でも特に、ニホンジカによる植栽木への被害は深刻化している。そのため、被害の状況や対策の特徴、コスト等を考慮して、適切な防除方法を検討する必要がある。</p> <p>以下に、シカ被害対策選択のポイントについて説明する。</p> <p>○防護柵 (写真 1)</p> <p>造林地の周囲を柵で囲んでシカの侵入を防ぐ方法</p> <ul style="list-style-type: none"> ・柵が破損すると造林地全体が被害を受けるリスクがある。 ・急傾斜や沢・谷を含む造林地では柵が破損しやすい ・植栽面積が広いと単木保護・大苗と比べて安価に設置できる。 <p>○単木保護 (写真 2)</p> <p>植栽した苗木を 1 本ずつ筒状の資材で保護する方法</p> <ul style="list-style-type: none"> ・柵が設置しにくい地形でも柔軟に対応できる。 ・苗木が資材の高さを超えるとシカ被害を受ける ・資材費が高く、植栽面積が広いと高コスト <p>○大苗植栽 (写真 3)</p> <p>シカの口が届く高さより大きな苗木を植栽する方法</p> <ul style="list-style-type: none"> ・他の対策と比べて防護資材の撤去がほとんどない ・苗木の高さは少なくとも 150 cm 程度は必要 ・苗木代が高く、植栽面積が広いと高コスト <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: flex-end; margin-top: 20px;"> <div style="text-align: center;">  <p>写真 1 防護柵</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>写真 2 単木保護</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>写真 3 大苗植栽</p> </div> </div>

項 目	作 業 内 容
(2) シカ被害を予測する	<p>○広域地図で大まかに判断</p> <ul style="list-style-type: none"> ・推定生息密度マップの作成 (図1) <p>○現地で簡単な調査をして判断</p> <ul style="list-style-type: none"> ・造林地へのシカ出現頻度の予測 (図2) ・造林地の被害度を予測 (図3)
	 <p>図1 四国のシカ生息密度分布(2015)</p>  <p>図2 皆伐地ごとの食痕スコアとシカ出現頻度の関係</p>  <p>図3 多重対応分析の結果</p>
(3) 設置・撤去コストを考える	<p>3種類の被害対策（防護柵、単木保護、大苗植栽）の資材費や撤去費、補助金を考慮して、50年伐期で採算性を比較したところ、</p> <ul style="list-style-type: none"> ・植栽面積が広い場合には防護柵が有利 ・植栽面積が狭い場合に、単木保護・大苗植栽のメリットがある <p>※ただし、単木保護では資材費が高く、大苗植栽では苗木代が高いため、植栽密度を低く抑える必要がある</p>
(4) 被害対策を選択する	<p>防護可能なシカ影響レベル、コストに見合う植栽面積、地形による資材の壊れやすさを判断し、被害対策の種類を選択する。</p> <p>※参考文献 森林総合研究所九州支所(2021) 西日本の若齢造林地におけるシカ被害対策選択のポイント</p>

(作成 林業研究センター)

